信毎歌壇

小池　光選

昨夜見た大きな満月アメリカのメジャーリーグのテレビに写る　（松川村）岡　豊村

一瞬でせまりくる闇手花火の終わったあとの火薬のにおい　（松本市）成沢　怜乃

いつの日かだれにも終わりはやってくるカセットコンロのボンベみたいに　（長野市）伊藤　恵子

打ち上る花火を遠く眺めゐて若き父母恋しかりけり　（小海町）依田　久代

七人の兄姉逝きて末っ子のわれ梅雨間の空に山鳩の鳴く　（木祖村）佐々木千代子

会えぬ間に五つになった女孫言う「ごはんつくるよあそびにきてね」　（東御市）広沢里枝子

清く澄む流れに住める魚ゆえ焼けば岩魚は苔の匂ひす　（長野市）北沢　京子

西暦に生まれし年を書くたびにわづかなれども違和感覚ゆ　（長野市）原田　浩生

短命の家系の中に吾ひとり九十五歳生き居る不思議　（小諸市）篠原　昭枝

終戦日母の一言なほ今に「地球が終るわけぢゃあないよ」　（箕輪町）向山　政俊

佳作

キリンの如く丈のびて蕾三十のカサブランカにわれ仰天す　（軽井沢町）藤巻　文枝

日の出前山の畑を訪ねれば鹿の親子に見つめられたり　（長野市）山田登志夫

選評

第一首、大谷選手の大活躍で、日本のプロ野球よりアメリカのメジャーリーグに熱中しているのではないか。大きな満月が写る。昨夜日本で見た満月である。第二首、子供の頃の手花火を思い出す。はかなく消えて、どっと深い深い闇につつまれた。なつかしい。第三首、すべてのものは必ずいつか終わりがくる。あるものには突然に来る。カセットボンベみたいに、という比喩が新鮮である。

小島　なお選

独学で英語学びし少年は原爆ガイドにユーモア交へて　（茅野市）五味みさほ

ざわわと悲しき風が吹きぬける遠きことといくつ扇風機の前　（坂城町）春日　武

都市化など知らぬと向日葵日もすがら渡り行く陽に顔を離さず　（佐久市）三石　俊司

八月の満月は地球に近づきて沁み入るような光を放つ　（松本市）田中とり子

息継ぎは水中で吐くということを六十にして知りし思い出　（長野市）小宮山文雄

三回忌記憶の中であの人はますます善い人ずるいと思う　（佐久市）高橋衣里子

白杖が当たれば先ずは「すみません」ときには電柱立て看板にも　（千曲市）上原　博司

来てみれば西瓜は鳥につつかれて赤く大きな口を開けをり　（飯綱町）坂井　寿男

蓮の花雨に打たれて淑やかに「やれば出来る」と声が聞こえる　（塩尻市）島津　文雄

人生の最後ぐらいは遠慮せず世話になること言いたり友は　（長野市）池田よし江

佳作

嬉しきこと誰彼に言う猫にも言う二倍三倍に満ち足りてゆく　（飯綱町）小林　紀子

友来れば嬉し時には煩わし生きものの情理解に難し　（坂城町）柄沢　満則

選評

第一首、複雑な思いがにじむ結句。けれど、話す側も聞く側も戦争を知らない今、時代に合わせた伝え方がある。戦後78年の現在地。第二首、扇風機の風が運んでくるのは過去の夏の出来事。ざわわ、に忘れてはいけない悲しみがさわだつ。第三首、顔を背けるように咲く向日葵（ひまわり）。今を見つめるのはいつだって恐ろしい。第四首、8月の月光の質感。慰撫（いぶ）のような、戒めのようなかなたからの光。

米川 千嘉子 選

湯上りの病夫を包むはわれの役　娘はやさしき役を呉れたり　（木祖村）佐々木千代子

兄の星一つ増やして天の川四兄弟の吾一人地に　（御代田町）土屋　春雄

日本一高いガソリン詰め込んで峡の山田へ草刈りに行く　（麻績村）小山みよ子

蚊帳を吊り蛍を放したわが族（やから）昭和の頃は仲が良かった　（長野市）せきたつお

日に炊ける米の少なさを競い合う二人暮らしの元ママ友ら　（長野市）原田りえ子

赤きくつ下駄箱にありて逝きし子を母は語らず身罷りにけり　（駒ケ根市）塩沢　春子

墓参り一族集い我が家へと昼のカレーは十二食なり　（小諸市）尾沼美枝子

老い夫婦映画観ながら涙拭くポップコーンは半分残す　（伊那市）赤羽　正彦

入力し顔に突き出す音声翻訳機（パケトー）笑顔の方が手っとり早い　（小諸市）星野　直人

小さき身に重きと思う獅子頭足のにじりに見えし本気度　（佐久市）三石　俊司

佳作

今日もまた病院廻りのバスを待つ温泉に行く人らと並び　（長和町）羽毛田　栄

夫没後七たび入院予期もせず狂いし計画あれこれとあり　（長野市）島田　怜子

選評

第一首、作者と娘たちで夫を風呂に入れる。体を支えたり洗ったりするのは若い家族。さっぱりした夫をバスタオルで迎えるのは作者。下句が文字通りやさしく心に残る。第二首、１人だけになった作者に天上の兄たちが星として輝く。上句が巧みだ。第三首、日本一の報道があったか。現在をさまざまに象徴する一首。第四首、「昭和の頃は」に説得力がある。夏、家族の歌が多く心に残った。

信　毎　俳　壇

今井　聖 選

稲の花写して友へ送りけり　（佐久市）上田　美紀

信州の水のうまさよ原爆忌　（富士見町）鬼束　淳子

大輪の向日葵風にボブ・ディラン　（松川村）中野　重行

ゆっくりとこの星を引く蝸牛（かたつむり）　（安曇野市）丸山　進也

蹲るこれぞ残暑や竜燈鬼　（長野市）武田　芳子

山百合の花粉を腕に郵便夫　（長野市）せきたつお

ビルの影拾つて歩く暑さかな　（須坂市）牧野　勇水

外国人リュック背負ひて踊かな　（上田市）竹内　創造

上空を自衛隊ヘリ草を刈る　（須坂市）東鳥賀代子

扇風機嫌ひは風の来ぬ席に　（佐久市）西田　和彦

佳作

存分に孤独楽しむ白日傘　（長野市）井出　節子

喧騒の世を去りがたし生ビール　（飯綱町）神谷　晋

選評

一句目、素直な感動と喜びが出ている。直接的な感動は巧みな慣用表現を超えて心にせまる。二句目、ああ信州に生れて良かったという地元肯定の一句。こうまで言われると「良かったですね」と言うしかない。三句目、大輪の向日葵（ひまわり）を前に読者はボブ・ディランのどの曲を流そうかと考えてしまう。四句目、この星を引かされる蝸牛（かたつむり）も大変だなと同情してしまう。地球は今そんな星だ。

神野　紗希 選

夏薊透明くんという渾名　（中野市）風間　陽介

信ずれば鰻も鰯八月来　（塩尻市）神戸　千寛

戦場の子子の水漁ると聞く　（飯綱町）仲俣　一重

こほろぎや壁に槍ヶ岳の光画　（小諸市）加藤　陽介

浅間嶺の雲湧き上る原爆忌　（佐久市）佐藤　勝子

大丈夫ころさないから蝌蚪の群　（飯綱町）神谷　晋

空缶にお湯さすスープ秋の風　（飯山市）滝沢　秀誉

「処理水」や雲の源夏の海　（長野市）原田　浩生

ナポレオンフィッシュの瞼草田男忌　（松本市）伊藤　和夫

蟲音にあの八月の空探す　（長野市）小池　秀雄

佳作

夕焼けやサフラン色にたゆたう吾　（飯島町）横山羽阿那

雑草が真っ直ぐ育つ雲の峰　（長野市）金谷　仁世

選評

一句目、「透明くん」とは、存在感が希薄だという意味のあだ名だろう。夏薊のとげが、誰だって傷つくのだと主張する。二句目、似ても似つかぬ鰻を鰯だと思い込めるのだから恐ろしい。間違った「信」がかつて、敗戦の8月へ日本を突き進ませた。三句目、子子の湧く水すらすする戦場の過酷。体験の遠のく今、詠み残す意味は大きい。四句目、こおろぎも写真も、モノクロームの世界観が秋だ。

坊城　俊樹 選

天地人滾りてをりぬ敗戦忌　（松本市）久我　綺乃

還り来よ高く花火の上がる夜に　（伊那市）後藤　敦子

雷はまだ遠いよと餓鬼大将　（中野市）横田　徳子

一幅の軸の中なる滝涼し　（下諏訪町）木口　碧

万緑の呑み残したる庵かな　（佐久市）神津　武士

いつまでもまぶたのうらに立ちあふひ　（長野市）北沢　京子

校庭に踏台一つ雲の峰　（塩尻市）林　行男

いつさいの着替そろへて草むしり　（松本市）竹内　京子

白竜の抜け殻浮ぶ夏の空　（長野市）飯森　泉

土笛の余韻の醒めず萩の道　（南相木村）猿谷　秀

佳作

夕鐘に合歓眠り初む池の端　（須坂市）牧野　勇水

ぼろぼろの余生なれども水中花　（坂城町）宮下　和夫

選評

一句目、天も地も人もみな滾るような酷暑なのだろう。殊に敗戦忌である8月15日は。この暑さはしかし日本人の血まで滾らせる。二句目、亡くなった近しい人への慟哭の句。打ち上げ花火が高々と上がる夜。それを見に帰ってきてほしい。三句目、餓鬼大将は何でも知っている。空が光ってから雷鳴が聞こえるまでの時間で距離がわかる。7秒後なら約2キロ先。まだまだあの山の向こうだと。